



Book List ~ 沖芸の先生による、今読むべきこの10冊 ~ Vol.18

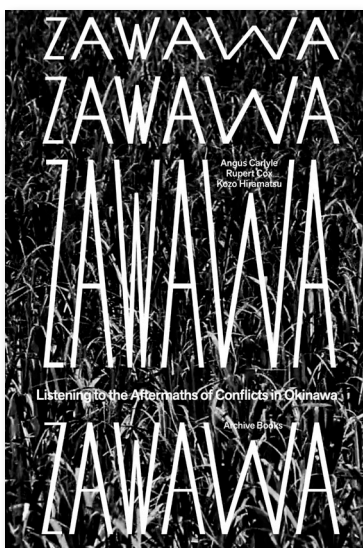
聞く・聴く・効く

- 心に沁みる音と音楽の世界 -

選者: 小西 潤子

大阪大学大学院博士後期課程修了、博士(文学)。2000年静岡大学准教授、2011年同教授、2013年より沖縄県立芸術大学教授。太平洋諸島の音楽文化を主な研究対象とする民族音楽学者。

県立芸大の先生が選ぶ
おすすめ本10選



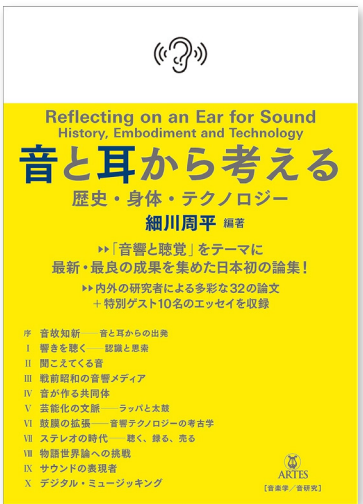
K/77/Z1

Zawawa

Listening to the Aftermaths of Conflicts in Okinawa

アンガス・カーライル/[ほか著]、ルパート・コックス/[著]
Archive Books 2024年

沖縄の音と映像、住民の語りを字幕に入れた映画「ざわわ」(2017年公開)の制作にあたって、イギリスを拠点とする人類学者のルパート・コックス、アーティストのアンガス・カーライル、京都大学名誉教授で音響学者の平松幸三が収集した沖縄戦体験者へのインタビューや音の記憶の語りおよびフィールドノート、エッセイからなる。「残響 reverberation」「反映 reflection」「共鳴 resonance」の3部構成とグラフィックデザインは、音に焦点をあてたドキュメンタリー実践の延長上に位置する。アート作品として、あるいは日英2カ国語表記の文字やビジュアルから、沖縄戦の余波を聴き取れるであろう。



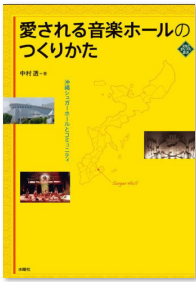
760.4/H94

音と耳から考える 歴史・身体・テクノロジー

細川周平編著
アルテスパブリッシング 2021年

サウンドスタディーズ、サウンドスケープ、音と共同体、民俗芸能の舞台化、音響テクノロジー、映画とゲーム、サウンドアート、デジタルによる音楽行為など、民族音楽学研究の最前線とも重なるテーマを扱った32本の論文と10本のエッセイからなる。事例には、ちんどん屋の響き、水面下の音、ベトナムの一弦琴、戦前の騒音問題、ラジオ放送、近代精神医療の「慰楽」、拡声器、物語世界の音、ゲーム、音のある芸術、パソコンなどが含まれる。日本近代音楽史を牽引してきた細川周平が、音楽、文学、映画、美学、人類学の研究者、アーティスト、評論家、作曲家と共に、音響と知覚に関する日本初の論集をめざして編著した図書である。

愛される音楽ホールのつくりかた 沖縄シュガーホールとコミュニティ



K/76/N37

中村透

水曜社 2012年

著者の中村透による佐敷町（現・南城市）文化センター・シュガーホールでの舞台芸術創造を題材に、芸術と地域の人々の音楽活動との関係を詳述し、ホールとコミュニティのあり方の指針を示した図書。2025年末には、中村透を偲ぶ7周忌コンサートが開催された。

音楽を展示する パリ万博 1855-1900



760.69/I57

井上さつき

法政大学出版局 2009年

「技術文明の祭典」であるイギリスの万博に対抗し、フランスは「芸術の祭典」としてパリ万博を開催した。本書は、その第2回目（1867年）以降、「音楽作品の展示」として開催された様々な公共音楽イベントに焦点をあて、フランスの音楽文化政策を明らかにする。

国歌 勝者の音楽史



767.5/A19

上尾信也

春秋社 2024年

各地で戦争が起こっている今、国旗と共に近代的国家のアイデンティティの表象となった世界中の国歌の成立史を振り返ってみるのはいかがか。実は、国歌の多くが西洋クラシック風のマーチ調か賛歌調で、現在ではオリンピックの「勝者の歌」としても機能している。

コンクール文化論 競技としての芸術・表現活動を問う



760.7/Ko75

宮入恭平ほか編著

青弓社 2024年

パリ万博を特徴づけた「コンクール」が日本に定着したのは、1932年。本書は、大規模な国際コンクールからローカルな地域芸能の大会、オーディション番組、スポーツ大会、学校の部活動まで、パフォーマンスアーツのコンクールが人々に何をもたらすのかを考察する。

唄めぐり



767.51/I72

石田千

新潮社 2015年

北海道の白老ポロトコタンから沖縄県の石垣島まで、2011年から約3年間、25の地域を回って地道な取材を積み重ね、唄と人と地域について記したエッセイ。著者の石田千は、エッセイスト、小説家で東海大学教授。民族音楽学者とは異なる感性が沁み入る図書。

おじいとおばあの沖縄ロックンロール



K/76/MU93

武藤新二

ポプラ社 2016年

それぞれの人生経験を積んだ65歳以上の男女が、若者の歌や踊りにチャレンジする物語。孫に特訓されたり、健康を取り戻したり…。歌詞と振り付け覚えられないけれど、おそろいの衣装でステージに上がるといつもより上等さ〜！定年後の生き方をも示唆する。

歌う鳥のキモチ



488.1/I84

石塚徹

山と溪谷社 2017年

1羽の鳥が持つ歌のレパートリーは、3〜10曲。同じ1羽はお気に入りの枝先や岩角で、なりゆきまかせではなく本能的な衝動で歌う。オリビエ・メシアン《黒つぐみ》は、クロウタドリという異種だが、クロツグミの歌は五線譜に乗せやすいとか。音楽家も気になる1冊。

「笛吹き男」の正体 東方植民のデモニーッシュな系譜



234/H24

浜本隆志

筑摩書房 2022年

ギリシャの牧神パンの笛も有名だが、こちらは中世ドイツのハーメルンで約130名の子どもが突然、「笛吹き男」と共に消えた事件。著者は、西洋史学者の阿部謹也が遺した謎に挑み、東方植民と集団妄想をキーワードに解明。さらにナチスの植民政策を展望する。